

# 図書案内

2018年 12月号

担当 2-1H 平井 2-1H 宮田

## 富山に関わりがある作家の本

もうすぐ今年も終わりを迎えますね。今回は富山に関わりがある作家の本を4冊紹介します。平成最後であるこの冬、郷土を代表する作家の作品に触れてみてはいかがでしょうか？紹介した本以外にも富山に関わりのある本は多数あります。興味のある人は図書館へ！



【富山との関わり】上市町出身！

『バケモノの子』 細田 守／著



バケモノの世界に迷い込んだひとりの少年がバケモノの弟子となり、修行や冒険を重ねるうちに共に成長していく物語です。映画を見た人も多いのではないのでしょうか。最後までドキドキしながら読むことができ、「親子の絆」について考える作品だと思います。この物語以外にも、『おおかみこどもの雨と雪』（上市町や立山が舞台になりました）や『未来のミライ』など、数多くのヒット作を生み出しています。

【富山との関わり】小2～5年生の4年間、富山市在住！

『七月に流れる花』 恩田 陸／著



この物語は、夏流という町に引っ越してきた主人公・ミチルが、不気味な人物「みどりおとこ」からの招待で林間学校へ行くことから始まります。「七月の水路に流れる花」や「みどりおとこ」の秘密とは……。美しく不思議な雰囲気を楽しめる作品です。ホラーやミステリーが好きな人、短時間で読書をしたい人におすすめです。続編の『八月は冷たい城』も是非読んでみてください。

【富山との関わり】入善町出身！

『定本 納棺夫日記』 青木 新門／著



遺体を清め棺に納める「納棺夫」として働く著者自身の実話と、その体験から生まれた小説と詩が収録されています。作者は親戚や妻子から忌み嫌われながらも、人の死や遺族と接することで次第に自らの仕事、生と死についてある思いを抱きます。映画「おくりびと」はこの本に感銘を受け制作されました。生、死、穢れ、尊厳とは何かを考えさせられる作品です。

【富山との関わり】富山市出身！

『パリ行ったことないの』 山内 マリコ／著



「パリ」に思いを抱く、年齢も境遇もさまざまな10人の女性たちの物語です。短編小説なので、長文が苦手な人も読み進められると思います。人間味を帯びた登場人物たちに共感して、読んでいるうちにパリに行ってみたくはないのでしょうか。著者の作品『ここは退屈迎えに来て』は富山県内でロケが行われ映画化されました。

## 読書が脳に与える効果とは？

読書をする時、人間は短期記憶を司る「海馬」や、感情・意味などを司る「扁桃体・前頭葉」など様々な脳の器官を使うことで、読書を通して非常に効率の良い脳トレを無意識に行っているそうです。また、読書には「大脳を活性化させる」効果もあります。ある実験では、読書中に作品の景色や音、においや味を想像することで、それらを司る大脳の領域が活性化し、新しい神経回路が生まれたことが確認されたそうです。加えて、脳の様々な部分を使うことからアルツハイマー病の予防にも効果があるとのこと。

最近では電子書籍が普及していますが、脳は紙の本でこそ鍛えられるという意見があります。紙の本は視覚・聴覚・嗅覚・触覚を使って情報を得ることができるからです。みなさんもぜひ、紙の本を手を感じながら読書を楽しんでみてください。

【出典】 <https://business-study.com/impact-reading-brain/>  
[https://www.chichi.co.jp/web/20180810chichi\\_contents2/](https://www.chichi.co.jp/web/20180810chichi_contents2/)

